32、短期入院受け入れについて

国立療養所刀根山病院
大久保　一　枝　　笹　田　み　や
押　方　真　理　　玉　田　葉　子
木　下　小夜子

短期入院の受け入れを開始して約２年の間に、入院32名、うち退院27名、さらに再入院１名の経過をとっている。

１年目の経過（受け入れ状況、長期入院者との関係等）については前回報告した。今回は短期入院患者の退院後のＡＤＬと通学状況に焦点をあて調査した。調査方法としては、郵送によるアンケート、外来カルテ、面接による情報収集を行なった。追跡調査としては不備な点が多いがその結果を報告する。

1.　入院時、退院時、退院後のＡＤＬ（更衣、排泄、歩行）の推移。

１）更衣について

入　院　時	退　院　時	退　院　後
全　介　助　15名	全　介　助　0名	20　名
部分介助　5名	部分介助　5名	
独　　自　17名	独　　自　27名	7　名

衣服の改良、着脱方法の指導等により殆んど全員が独自で更衣可能になって退院するが退院後も引き続き努力している者は少なく全く入院前と同じ状態になっている。できなくなっている理由としては、時間がかかる。自分でやりたがらない。可愛想な気持が先行して母親が手出しをしてしまうなどである。

２）排泄について

	入　院　時	退　院　時	退　院　後
全　介　助	19　名	10　名	17　名
部分介助	13　名	22　名	15　名

退院後全介助を要する理由は、和式トイレしかない。装具をつけているのでできない。間に合わない。だんだんできなくなった等である。

3）歩行について

	入院時	退院時	退院後（1年経過した者）
独　　歩	22	2	
短下肢装具		4	同じ程度　10
長下肢装具		5	歩けなくなった　13
腱延長手術後長下肢装具		11	
車　椅　子	5	1	
腱延長手術後長下肢装具		4	

歩けなくなった理由としては、畳の生活で装具歩行ができない。忙しくて装具をつけてやれない、学校だけで装具歩行していたがだんだん歩けなくなった等であり、周囲の姿勢が大きく影響しているように思える。

2. 就学状況について

退院者27名全員学校の受け入れ状態はうまくいっているようである。再入院は現在1名だけであるが、他2名が再入院申し込み中であり、小学校の時はあまり問題にならないが、中学に進学する時に問題があるようである。

元学校に復帰	20名
普通学校　→　養護学校	4名
普通学級　→　養護学校	2名
再　入　院	1名

再入院になった事例は、13才男子（現在中1）6年生のとき車椅子にて入院、長下肢装具歩行可能となり退院したが、中学1年に進学のとき学校の受入れが悪く再入院、再入院直前頃から車椅子生活となり、入院と同時に起立訓練からやり直し、現在装具歩行は十分可能で、ＡＤＬは殆んど自立できている。

3. 考　　察

進行性である筋ジ患者にとって短期入院が有意義なものであり続けるにはいろいろな困難がある。両親、友人、学校などの協力と本人の努力が必要である。今後尚再入院の増加も予想されるが、必ずしも入院だけが最良ではないと思われるので、病棟では短期入院の意義を十分検討して有効なものにしていく必要を感じる。尚当院では、これら短期入院のアフターケアーとして、夏休みを利用して1週間入院を試みたが、今後もよりよい方法があれば取り入れていきたいと思う。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

短期入院の受け入れを開始して約 2 年の間に、入院 32 名、うち退院 27 名、さらに再入院 1 名の経過をとっている。

1 年目の経過(受け入れ状況、長期入院者との関係等)については前回報告した。今回は短期入院患者の退院後の ADL と通学状況に焦点をあて調査した。調査方法としては、郵送によるアンケート、外来カルテ、面接による情報収集を行なった。追跡調査としては不備な点が多いがその結果を報告する。